



第 45 号

● 目 次 ●

巻頭言：東北アジア総合地域学をめざした新しい体制	1
最近の研究会・催し	2-3
新刊紹介	4
客員教授紹介	5
センター新任教員	5
センター新メンバー	6-7
川北合同研究棟（東北アジア研究センター）東側出入り口の改装	7
活動風景：ロシア沿海地方の農村に思う	8
編集後記	8



巻頭言

東北アジア総合地域学をめざした新しい体制

東北アジア研究センター長 佐藤 源之

東北大学は2009年度に文部科学省の国際化推進事業であるグローバル30の実施校に採択されました。本事業は我が国の留学生受入数を増やすことを最終的な目標とし、たとえば英語での講義履修だけで学部卒業の単位が修得できるなど、これまで大学院が中心となってきた留学生教育を学部まで拡張し、全学的な留学生数拡大をめざしています。一方、より多くの優秀な学生を日本に招くため、これまで日本の大学情報が十分伝わらなかった地域に連絡事務所を設置し、日本留学に必要な情報を提供することも計画しています。東北大学ではグローバル30への申請に当たり、特にロシアにおける学術活動、大学との教育・活動を推進することを目指すこととしました。東北アジア研究センターは、1997年にロシア・ノボシビルスクに東北大学として最初の海外拠点を開設するなど、ロシアにおける研究活動を活発に実施してきました。こうした実績は学内でも高く評価され、本センターにロシアでの全学的な活動を支える機能が期待されていることは言うまでもありません。

東北アジア研究センターは創設当初より、ロシア科学アカデミーとの交流を通じたロシアとの研究・教育交流活動の推進を目標の一つと定め、特定の専門分野での活動を展開してきましたが、東北大学はロシアでの学術交流を展開するため、全学組織としてロシア研究交流推進室を設置しました。室長



吉林大学との情報交換会（3月）

には、本センター教員と共にロシアとの交流を積極的に進めてきた木島副学長が就任されています。また推進室メンバーには東北アジア研究センター教員が多数加わり、シベリアなどでの経験を東北大学の活動のため、惜しみなく活用する体制が確立しつつあります。同時に、これまで本センターがロシアに対して東北大学の情報交換の窓口として果たしてきたサービス業務の一部をロシア研究交流推進室へ移行することで、より幅広い活動が可能になる一方、本センター教員はロシア研究機関との共同研究、大学における教育プログラムの実施など、より専門性を活かした分野での活動に専念できるものと期待しています。

本センター教員が行ってきた多彩な研究も、東北アジア地域研究の広汎性を考えれば、その一部を拾い上げているに過ぎません。今後本センターの研究活性化にはセンター外部の研究者との協力体制を構築し活動の幅を広げていくことが重要だと考えています。2010年3月には中国・吉林大学東北アジア研究院の教員を招聘し学術連携の可能性検討を開始しました。本年度、本センターは富山大学極東アジア研究センターならびに島根県立大学北東アジア地域研究センターと部局間学術交流協定を締結します。本センターを含めた3つの研究センターは得意とする研究分野が少しずつ異なりながら、東北アジアを研究とするという強い関連性を持っています。更に本センターでは2009年度より、センター外の研究者を対象とした、研究公募の制度を発足いたしました。この制度も、本センターの研究者との共同研究、あるいは、本センターが所有する学術資料、設備などを利用した研究の発展をめざしています。このような新しい連帯形成が私たちのめざす「東北アジア総合地域学」の学問体系の確立につながるものと信じております。

最近の研究会・催し

「東北の地域を考える」シンポジウム

このシンポジウムは、東北圏広域地方計画協議会、東北大学土木工学グループ、東北大学防災科学研究グループ（代表：平川新東北アジア研究センター教授）が主催して、「身近なお宝再発見～東北らしさを活かすために～」をテーマに、2010年2月27日、ホテルメトロポリタン仙台で開催されました。

これまでの成長発展路線は、近代化の名のもとに、それぞれの地域がもつ固有の自然や風土を著しく劣化させてきました。しかし経済至上主義が行き詰まりをみせ、社会に閉塞感がたどようなか、どうやって地域に誇りと元気を取り戻していけばよいのでしょうか。その視点から、地域の個性に磨きをかけ、「東北らしさ」を發揮するための方策について考えてみようというのが、このシンポジウムの趣旨でした。

最初に、「地域の宝を活かしてつくる新たな国土」と題して本センターの奥村誠教授、「東北の歴史に探る未来の宝」というテーマで平川が基調講演をしました。続いて、東北の各地で個人的な取り組みをしている方々による「東北らしさを活かすために」のパネルディスカッションがおこなわれました。パネラーは、けせんブレカット事業協同組合の泉田十太郎専務理事、雪国植物園（新潟県）の大原久治園長、三宿（湯原宿、楡下宿、二井宿）地域連携協議会の島津憲一事務局長、横手市の佐藤良吉建設部長でした。

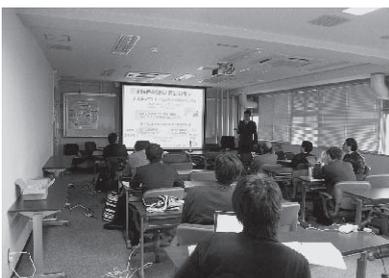
奥村教授は、日本の他地域や外国にない東北の特徴は何かと問いかけたうえで、「日本に東北があってよかった」「世界に東北が

あってよかった」といわれるようになるために、北国型の産業、東北らしい多自然型の観光を提案しました。また宮城県の平均年齢は全国8位、政令指定都市のなかで仙台は3位だという、あまり知られていないデータを紹介し、仙台都民をターゲットにした観光戦略も積極的に打ち出すべきだと述べました。

平川は、歴史的・自然的「東北」の特性を前提に、凶作・飢饉を強調して暗く貧しいイメージをもたせる従来の歴史観を転換し、ダメージを克服して日本一の米作り地域となった点を再評価すべきだとして、「みちのく2千年の米作り」史観こそ必要だと強調しました。また宿場や街道、伝統的な行事や食、古民家や民話のなかに、利活用すべき地域の宝があること、「いま居るところこそ本住まい」という地元を愛する心が、地元の宝を発見し守り育てることにつながると述べました。（平川 新）



2009年度東北アジア研究センター研究報告会



2010年4月2日（金）9:00～18:00、東北アジア研究センター4階大会議室において開催された。例年のように共同研究とプロジェクト研究ユニットの活動のそれぞれについて、15分および20分の報告の後10分程度の

質疑が行われた。これらの研究活動報告書のPDFファイルは事前にセンター事務情報システムにアップロードされ、当日PC上で閲覧することを可能とした。それらの内容は、センターの年次活動報告書の一部として印刷するべく準備している。今回は新たに、東北大学の5つの研究所とセンターの共同で実施されている研究所間連携研究についても、概要の報告がなされた。

研究課題名と発表者は以下のとおりである。

●共同研究：（15分報告、10分質疑）

- ・旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究（岡 洋樹）
- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析（鹿野秀一）
- ・中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証（瀬川昌久）

- ・湖沼沿岸生態系食物網の解析的研究（鹿野秀一）
- ・北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究（岡 洋樹）
- ・二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望（上野稔弘）

●プロジェクト研究：（20分報告、10分質疑）

- ・東アジア出版文化国際研究拠点の形成研究ユニット（磯部 彰）
- ・東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット（栗林 均）
- ・前近代における日露交流史料研究ユニット（寺山恭輔）
- ・北アジア戦略データベース構築研究ユニット（工藤純一）
- ・リモートセンシング研究ユニット（佐藤源之）
- ・東アジアにおける移民の比較研究ユニット（木曾恵子）
- ・歴史資料保全のための地域連携研究ユニット（佐藤大介）
- ・21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット（岡 洋樹）
- ・シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット（高倉浩樹）

●研究所間連携研究：（15分報告、10分質疑）

- ・スマートエイジングを支える社会システムテクノロジー（奥村 誠）

●プロジェクト・ユニット「21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究」

平成22年度 第1回セミナー「シベリアからの視線：シベリアのアジア研究」

センターでは、岡洋樹教授を代表として、「21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究」というプロジェクト・ユニットを昨年度立ち上げた。このプロジェクトは、センター内外で行われているさまざまな研究の成果を統合するとともに、関連研究者との協力・交流態勢をつくり、東北アジアの地域イメージを創出することを目的としている。本年度は、第1回のセミナーとして、ロシア連邦ノボシビルスク国立大学東洋学部准教授エレナ・ヴォイティシク氏をお招きして、シベリアにおけるアジア研究の現状について紹介していただくとともに、本センター准教授高倉浩樹氏より、本センターとノボシビルスクとの研究・教育交流、とくに昨年11月に第1回目を実施した訪問講座「日本とアジア」について紹介していただいた。

エレナ・ヴォイティシク准教授は、日本文化の研究を行うとともに、同大東洋学部日本語コースの主任教員として、日本語・

日本文化に関する教育に従事している。また同氏は、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・人類学研究所の研究員でもある。同氏からは、同研究所や大学で日本・中国など、アジア研究に従事する研究者を具体的に報告していただいた。シベリアにおけるアジア研究は、考古学・人類学研究所などシベリア支部傘下の研究所で行われているほか、ノボシビルスクやイルクーツク、ウランウデなどの大学でも活発である。またノボシビルスク国立大学では、日本語コースの他に、韓国語のコースや、孔子学院による中国語コースが設置されており、学生達は言語や文化・歴史・経済などさまざまなテーマで学んでいる。

続いて高倉浩樹准教授からは、訪問講座「日本とアジア」が、100名を越す学生・教員を集めて成功を収めたことや、講座のあとで行われた現地学生による研究発表の様子などが報告された。

ロシアは、シベリアや極東を含み、中国・日本・中央アジアに隣接することから、古くからアジア研究の伝統を有する国である。ノボシビルスクの研究所は、日本研究ばかりでなく、モンゴルでの考古学調査や中国研究にも多大な実績を有する。とくに日本への関心は高いものの、日本の研究者・学生との交流はまだ限られている。アジア研究は、同国の研究者との交流においてポテンシャルの非常に高い分野だと言える。今後東北アジア研究センターのノボシビルスクとの交流が、アジア研究の分野でいっそう深まることが期待される。(岡 洋樹)



講演するヴォイティシク先生



質疑応答は和やかに

東北アジア学術交流懇話会総会および講演会「東北大学のロシア研究戦略」の開催

●東北アジア学術交流懇話会総会

2010年5月7日10:00～10:30、東北大学東京分室において東北アジア学術交流懇話会総会が開催され、会員29名が出席した。総会では西澤潤一会長ご挨拶の後、佐藤源之理事長から平成21年度の活動報告、決算報告があり承認された。さらに22年度の予算案、活動計画、さらに総会と理事会の役割を変更する内容を含む会則の改正案についての説明があり、いずれも承認された。

- | | | |
|----|----------------|----------------|
| 議事 | 1. 平成21年度 活動報告 | 4. 平成22年度 活動計画 |
| | 2. 平成21年度 決算報告 | 5. 会則の変更について |
| | 3. 平成22年度 予算案 | 6. その他 |

●講演会「東北大学のロシア研究戦略」

総会後の10:40からは同会場で講演会「東北大学のロシア研究戦略」が開催された。本講演会は、東北大学が2009年度に文科省の国際化推進事業であるグローバル30の実施校として採択され、特にロシアにおける学術活動、大学との教育・活動の推進を目指していること、東北アジア研究センターが1997年にロシア・ノボシビルスクに東北大学初の海外拠点を開設し、ロシアにおける研究活動を活発に実施してきていることなどを背景に、今後、東北アジア研究センターと東北大学、また宮城県がいかに協力しながらロシアとの交流を進めるかについて、現状報告と今後の見通しについて講演する目的で企画されたものだった。本講演会は一般公開講演会として開催し、ロシアに深く関心を持つ50名以上の参加者があった。

今回の講演の共通テーマは「ロシアとの交流」であったが、大学と地域の連携については今後の高等教育のあり方について、会場からも積極的に発言があり活発な意見交換の場となった。



今後の高等教育では国際的に活躍できる人材育成が期待されている。そのためには教育現場の提供、教育への参加など、社会自身が多くの役割を分担することが望まれる。一方、大学は、社会の様々な分野からの貢献を可能とする仕組み作りを考えていくことが望まれる。ロシア関連の活動報告には収まらない講演によって、今回の講演会は地域の活性と大学のあり方を再認識する上でも興味深い催しとなった。

【講演会プログラム】

- 10:40～11:00 開会
東北アジア学術交流懇話会 西澤潤一会長挨拶
- 11:00～12:40 講演(1件20分+質疑5分)
「グローバル30プログラムと東北大学におけるロシア交流推進について」
木島明博 東北大学 副学長・ロシア交流推進室長
「宮城県のロシア経済交流と今後の展開」
千葉 章 宮城県国際経済・交流課 副参事兼課長補佐(総括担当)
「東北アジア研究センターの最近の活動」
佐藤源之 東北大学 東北アジア研究センター センター長
「東北アジア研究センターにおけるロシア研究活動」
岡 洋樹 東北大学 東北アジア研究センター 副センター長
- 12:40 閉会

(徳田 由佳子)

新刊紹介

○東北アジア研究 第14号 2010年2月

平成21年度のセンター定期刊行物で、今回で14冊目となる。若手研究者の研究成果が例年よりも多い。論文はフリー審査を経て掲載されたものである。(磯部 彰)

○東北アジア研究シリーズ (外国語)

・第11号 Good to Eat, Good to Live with: Nomads and Animals in Northern Eurasia and Africa (食べるだけでなく、共に暮らすに適するもの—北方ユーラシアとアフリカにおける遊牧民と動物) / フロリアン・ステムラー、高倉浩樹 編 2010年2月

ユーラシア北極圏・モンゴル・アフリカの牧畜民においてみられる人—動物関係の多様な諸相を人類学を中心に、社会学・遺伝学・科学とアートという多様な切り口で論じた論文集。家畜と野生動物という一見自明な区分を、様々な地域の民族誌的事実を通して比較することで、その境界が柔軟なダイナミクスをもっており、それが現代世界における牧畜社会の維持と生成の理由を理解する上での鍵となることを明らかにした。2009年1月～7月に客員准教授を勤めたフロリアン・ステムラー氏と高倉との共編著である。(高倉 浩樹)

○東北アジア研究センター叢書

・第37号 『蒙文総彙』—モンゴル語ローマ字転写配列— vi + 592頁 / 栗林 均 編 2010年2月

本書は中国清朝末期の1891年に北京で出版されたモンゴル語・漢語・満洲語の3言語対照辞典『蒙文総彙』に収録されている全項目をモンゴル語のローマ字転写形のアルファベット順に配列したものである。『蒙文総彙』は、全12冊からなる木版印刷本で、字母順に配列された近代の代表的なモンゴル語辞書で、収録されている項目の総数は16,381にのぼる。本書では、全項目のモンゴル語のローマ字転写、モンゴル文字翻刻、漢語の翻刻、満洲語のローマ字転写、原書における出現位置を示した。(栗林 均)

・第38号 18～19世紀仙台藩の災害と社会 別所万右衛門記録 / 佐藤大介 編著

本書では、19世紀の仙台藩士別所万右衛門が記した飢饉記録を基に、人々の災害対応や危機管理をめぐる政治過程について解明した。一連の危機対応やそれをめぐる政策論争は、当該期の日本社会における災害と社会との関係を考察する上で示唆に富んだ内容を含んでいる。あわせて、本書には飢饉記録の全文解説も収録した。ここには天明・天保飢饉の全過程や、近い将来の発生が予想される宮城県沖地震と同一震源とされる天保6年(1835)6月26日の大地震など、当該期の歴史災害の状況を知らうる内容が豊富に記載されている。(佐藤 大介)

・第39号 ロシア史料にみる18—19世紀の日露関係 第5集 / 平川新監修、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌

子 編 2010年2月

本史料集には、レザーノフ使節団が江戸幕府から国交樹立交渉を拒否されて帰還後の史料49点の日本語訳、そのうち我々がロシアで新たに発掘した35点のロシア語元史料も後半に収録している。フヴォストフらによる日本人集落襲撃(文化魯寇事件)に関する生々しい文書をはじめ日露関係史の考察にとって貴重な史料集となっている。総計1175頁(うちロシア語新史料199頁)史料集五冊の刊行で、18世紀から19世紀初頭にかけてのロシアの対日関係に関する主な史料を日本語で読めるようになった。(寺山 恭輔)

・第40号 清初刊教派系宝卷二種の原典と解題—『普覆週流五十三参宝卷』と『姚秦三蔵西天取清解論』— / 磯部彰 編 2010年2月

本書は、清朝の初期に、民間で作られた宗教経典である宝卷2種の複製とその提要から成る。『姚秦三蔵西天取清解論』は、順治2年(1645年)に出版された宝卷である。一方、『普覆週流五十三参宝卷』は、康熙32年(1693年)、黄天道と呼ばれる宗派の流れをくむ宗祖による製作で、北京で出版された。明末清初の宝卷は、勅版経典を模倣した立派な体裁であり、宮廷のある北京城内の出版元で仏教や道教の経典とともに作られたことから、当時は禁書ではなかったことが判明する。(磯部 彰)

○東北アジアアラカルト

・第23号 ロシア極東の形成—N.I.ドゥビーニナ著『ブリアムール総督』三部作より— / 寺山恭輔 編 2010年2月

19世紀半ばにロシアがアムールおよび沿海地方を獲得し今日の「東北アジア」の地政学的枠組みが構築される。本書はその領土的拡大に伴いロシア極東を管轄すべく帝政ロシアが設置した行政機関ブリアムール総督府(1884年—1917年)の3人の総督に焦点をあてたドゥビーニナ教授による伝記三部作の内容を紹介し、19世紀半ば以降のロシア極東史をたどる。詳しい研究が存在しなかった帝政ロシアの地方行政、日本人、中国人、朝鮮人などとの接触の歴史について基本的な知識を獲得できる。(寺山 恭輔)

・第24号 トナカイ! トナカイ!! トナカイ!!! 研究成果を市民に還元する自主展示の試み / 千葉真弓・徳田由佳子・高倉浩樹 編 2010年2月

2008年12月、東北アジア研究センター公開講演会と連動させ、シベリア民族写真と民具の展示会がせんだいメディアテークで行われた。この企画はセンターの関係者に加えて、学内の研究者・学生そして学外の職業専門家と共同で行った点に特徴がある。本書では、展示の準備過程つまりメイキングを明らかにすることで、研究と市民社会の連携の可能性を提起するとともに、文系の研究成果を社会に還元するための参考書ともなっている。(高倉 浩樹)

◆ 客員教授紹介 ◆

サルダナ・ボヤコヴァ先生（歴史学博士）

私はロシア連邦の中でも最大級のサハ共和国（ヤクーチア）にあり、ロシア科学アカデミーシベリア支部最古で今年設置75周年を迎える北方少数民族問題人文科学研究所の北極圏部長をつとめています。ロシア北極圏の輸送・工業開発史とその少数民族に与える影響に関する専門家でジェンダー研究にも従事しています。著作には「ヤクーチア北部開発と発展におけるグラヴセヴェモルプーチ」（ノヴォシビルスク1995）、「北極開発とアジア東北部の諸民族（19世紀—1917年）」（ノヴォシビルスク2001）、「北部の女性：新しい社会アイデンティティーの探求」（共著ノヴォシビルスク2004）があり、ロシアのみならず多数の論文を英国、ノルウェー、ポーランド、米国、

フィンランド、日本で発表してきました。センターの高倉浩樹准教授とはシベリア諸民族の現代生活の研究についていくつかの日露共同研究を実行してきました。在仙中の研究テーマは「北洋航路の発展史」です。日本全体についていえることですが、仙台では自然や、その人間との調和のとれた関係がととも気に入っています。さらに目標を持ち勤勉で、それに熱中している日本の若者がとても気に入りました。



◆ センター新任教員 ◆

横田裕也（助教）

2010年4月より、東北アジア研究センター佐藤研究室の助教になりました、横田裕也です。昨年度、博士号を取得したばかりの新社会人です。これまでの研究ではマイクロ波ミリ波を使用したレーダイメージング技術の研究を行ってきました。その中でも、18-40GHzの広帯域ミリ波反射計を核融合プラズマに適用し、プラズマの密度分布を測定するシステムの開発を行ってきました。マイクロ波ミリ波は赤外線や可視光などとは違って誘電体媒質を透過する特徴があるため、物体の内部構造を非破壊で検査することができます。さまざまなアプリケーションに適用することで、非接触で心拍を測定したり、異物検査を行ったりできる場所に面白さを感じて研

究を行ってきました。佐藤研究室では地中レーダを使用して地面の中にあるものを掘ることなく（非破壊で）推定する研究や民生用合成開口レーダの開発などの研究を行っていく予定です。

東北地方で暮らすのは初めてで、予想以上の気温差にすでに驚いています。旅行が好きなので、仙台での生活を機会に東北地方の名所を回ってみたいと思っています。よろしくお願いたします。



佐藤大介（助教）

4月より本センターの助教に赴任しました佐藤大介です。昨年度までは教育研究支援者として歴史資料の防災活動と保全に取り組んできました。今年度からは防災科学研究拠点において、災害から地域社会と人々を守る実践的防災学の構築という大きな研究課題に取り組むこととなります。宮城県では10年以内に70パーセントの確率で宮城県沖地震が発生すると予測されており、拠点は重大な使命を担っています。本センターをはじめとする多くの先生や地域の方々と協力しながら、災害に強い社会作りにも貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

専攻は日本近世史で、これまで一貫して出身地でもある東北地方をフィールドに研究を続けています。最近では本センターでの活動とも関連して、災害と社会との関係に注目して

分析を進めております。近世の奥羽地方は多くの災害を経験する一方、人々は災害への対応や復興過程を通じて危機管理をめぐる社会的力量をはぐくんでゆくという側面もありました。一連の過程には、従来の通史的な理解ではとらえられない様々な歴史的意義が含まれていると考えられます。本センターの恵まれた研究環境を生かし、地域の歴史資料の掘り起こしと保全を基に、新たな東北の歴史像の解明を目指して日々精進していきたいと思っております。



◆ センター新メンバー ◆

天野 真志 (教育研究支援者)

2010年4月より「防災科学研究拠点」プロジェクトで、教育研究支援者として勤務しております天野真志です。前年度まで東北大学大学院文学研究科博士後期課程に所属しておりました。

専門は日本近世・近代史です。明治維新と総称される政治変動は、日本の国家体制の変容を促し、近代天皇制国家の誕生をもたらします。私のテーマは、その過程で発生したさまざまな政治運動に焦点をあて、一連の活動を担った人物たちの政治的立場や活動実態から、当該時期の歴史的意義を解明することです。幕末期は、国家としての方向性を模索し、激動のなかに身を投じた人たちが全国規模で登場します。こうした人物の言動を通して、この時期の時代状況を展望したいと考えています。

「防災科学研究拠点」は、文系・理系の枠を超えた実践的防災学の推進を目指しています。様々な角度からの防災・減災システムの構築は、来るべき宮城県沖地震に備え、急務の課題でもあります。決して人ごとではない大規模地震を見据え、これから地域とともに防災体制を実現化していく必要があります。

プロジェクトや本センターの活動を通して他分野から多くの知見を得て、刺激的な日々を送っております。これからもよろしくお願いいたします。



蝦名 裕一 (教育研究支援者)

2010年4月より教育研究支援者として勤務している蝦名です。現在、「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」で活動しています。本研究ユニットでは、東北地方を中心に、古文書をはじめとした歴史資料の保全活動を実施しています。

歴史資料、特に個人所蔵の古文書などは、代替わりや改築などを契機に散逸・処分されてしまうケースもあり、本研究ユニットでは、歴史資料を後世に伝えるべく、歴史資料の所在調査や、古文書の整理・保全およびデジタルカメラによる撮影などをおこなっています。また、活動を通して、調査先の方々から地域の歴史について学ばせていただく機会も多々あります。

私の専門は、江戸時代における儒学をはじめとした学問活動が、当時の政治状況に与えた影響について、盛岡藩や仙台

藩を事例に研究しています。江戸時代は武士や民衆の間で学問活動が浸透していった時期ですが、一方で学問受容をめぐる対立や、時には家中騒動に発展しており、こうした事例について、当時の人々が残した日記や読書記録、蔵書などの分析により研究しています。

歴史資料の保全活動では、膨大な歴史資料と直接向き合うことになります。今後どのような歴史資料に巡り会うことができるのか、胸を躍らせている所です。どうぞよろしくお願いいたします。



スチンバト (斯欽巴図) (教育研究支援者)

本年5月から東北アジア研究センターの東北アジア民族言語情報処理ユニットの教育研究支援者として採用されたスチンバト (斯欽巴図) です。1972年生まれの内モンゴル・アルホルチン旗出身のモンゴル人で、1994年に中国・中央民族大学モンゴル語学部 (文学学士) を卒業し、内モンゴル・オラウンハダ (赤峰) 市の映画翻訳会社に勤めていました。2001年に日本に留学し、本年3月に環境科学研究科で学術博士号を取得しました。

私の専門はモンゴル語学であり、『元朝秘史』、『三合語録』など古代から近代までのモンゴル語の書記記録によって当時の言語状態を明らかにしようというものです。特に、清代の満洲文字で表記したモンゴル語の文献を研究対象とし、それに深く関係する満洲語の文献資料にも興味を寄せています。

自然と社会と共に急変している内モンゴルの出身者であり、異郷で自分の母語を研究する私にとっては、自然・社会・歴史という三つの環境システムを課題にした東北アジア研究センターの存在は非常に魅力的な存在です。こうした異なる分野を取り入れたユニークな研究方法と研究環境はモンゴル語の地域的・歴史的研究に新たな道を開くことと信じています。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。



ウルジートグトホ (烏力吉套格套) **教授** (中国政府派遣研究員)

本年4月から1年間、ウルジートグトホ (烏力吉套格套) 教授が、中国政府派遣研究員として本センターに滞在される。

先生は、内蒙古民族大学の蒙国学学院に在職して、モンゴル文学、特にモンゴル語の仏教文典の研究を専門としている。

1962年の生まれの48歳。2006年に内蒙古大学蒙国学学院で「モンゴル語金光明経の研究」によって博士号を取得し、それにもとづいて『モンゴル語「金光明経」の語彙研究』(遼寧民族出版社、2008年)という著作を上下二冊本として出版している。「金光明経」は、仏教の経典の中でもモンゴル族の間に広く普及し、その文化形成に大きな影響を与えたと言われている。先生の研究の目的は、文献学、仏教学、人文学といった様々な観点からこの仏教文献を考察し、それらの理論を結

びつけて「金光明経」の真義を説明することである。

先生は、日本語にも堪能で、日本滞在中に、日本の仏教学およびモンゴル文学の研究の蓄積と方法を学び、この分野の研究者と交流して情報交換を行うことを楽しみにしておられる。東北アジア研究センターでは、東北アジア民族文字言語情報処理研究ユニット(研究代表者:栗林)に加わり、モンゴル語文献資料の電子化利用について協力を行う。

(栗林 均)



頼旭貞 (ライ シューチェン) (客員研究支援者)

頼旭貞さんは、台湾南部の屏東県地域の客家文化の研究で、本センターには2010年1月から滞在中です。客家とは、漢族の中の一サブグループで、客家語という独自の方言を話し、風俗習慣などその他の文化面においてもしばしば他の漢族とは異なる特徴をもっているとされる人々です。中国本土南部一帯、更には台湾や東南アジアの華人社会にも、客家系の人々が少なからず住んでいます。台湾では、日本統治時代以前から台湾に住み続けてきた人々およびその子孫を「本省人」と呼びますが、それはさらに福建語系の言葉を話す人々と、客家語系の言葉を話す人々から構成されています。頼さんは自らが屏東県の客家村落の出身であり、台湾の国立中正大学の課程在籍中から一貫して同地域の客家の儀礼知識や文化変容、エスニック・アイデ

ンティティーなどを研究してきました。本センターでは瀬川教授が長年にわたって中国本土南部(広東省、福建省、海南省など)の客家を研究してきており、両者の知識を持ち寄って共同研究を行うことを目的に、今回の来日となったものです。頼さんは豊富なフィールドワーク経験をもち、本センター滞在中もそうした調査資料をもとに、台湾南部の客家の祭祀儀礼に関する研究成果を日本語でとりまとめる作業に取り組んでいます。



川北合同研究棟 (東北アジア研究センター) 東側出入口の改装

2010年4月1日に、川北合同研究棟(東北アジア研究センター)のエレベーターホールが改装されました。アジア研を紹介するビデオが流れるモニターがあるほか、専用掲示板、また展示コーナーも設けられています。

(撮影: 斎藤秀一)





ロシア沿海地方の農村に思う

東北アジア研究センター助教 大窪 和明

2009年9月にロシアのウラジオストクで開催された国際地理学会 土地利用研究会に参加しました。この研究会では2日間の研究発表会が行われた後、4日間に渡ってウラジオストクやナホトカといったロシア沿海地方の現地視察が行われました。現地視察では、ナホトカ港、ヴォストチヌイ港や、東シベリア石油パイプライン計画の終着地であるヴランゲリ湾のパイプラインを視察し、極東地域の港湾施設の充実ぶりや天然資源の豊富さを実感することができました。その一方、バスで見学地を巡る途中に見えたのは、整備の行き届いていない農地や閑散とした農村でした。

経済発展による都市化の進行は都市部と地方部との所得格差を拡大させ、地方部から都市部への若年者の流出をもたらします。ロシアも例外ではないといえます。地方部の農村においては、地域の気候や風土に見合った生活の知恵が世代を通じ長い年月をかけて蓄積されています。この知恵は、地球環境に優しい新たな技術を模索していく上で貴重な知恵であるといえます。ところが若年者の流出により、世代間での知恵の伝達が滞り、こうした貴重な知恵が失われてしまう恐れがあります。

そのため、地域に蓄積された知恵を人文科学的な手法で発掘し、蓄積していくことの必要性は今後、益々高まると考えられます。発掘方法の一つには、地域住民から直接、聞き取り調査を行う方法があります。高齢化の進んだ地方部では、地域の高齢者から話を聞く機会が多くなります。高齢者は豊富な経験に基づいた有用な知恵を持っている一方で、高齢による記憶の劣化のため、調査員は情報の収集に多くの時間、労力を費やすことが予想されます。限られた調査時間の中で地域住民から有用な情報を得るためには、地域住民1人

当りの聞き取りに当てる時間を少なくし、より多くの住民から聞き取り調査を行うべきか？逆に、少数の地域住民に多くの時間をかけて聞き取り調査を行うべきか？といった疑問が生じます。

この疑問に答えるためには、人々の間で知識がどのように伝播していくか？ということ把握する必要があります。この点を把握するためには、人々の“つながり”をネットワークとして表現し、人々の相互作用によって最終的な生じる現象を分析する社会的ネットワーク分析が役に立ちます。この分析手法は、人々の職探しや伝染病の感染拡大のメカニズムの解明に成果を挙げています。私たちは、この社会的ネットワーク分析において高齢者と若年者の間、または高齢者同士、若年者同士での知識の交換が行われたときに、オピニオンリーダーになる人はどういう人か？や、人々がより良い意思決定を行うための知識の形成に必要なネットワークの条件は何か？といったことの分析を進めています。現在、東北アジア研究センターと5つの研究所群との「研究所連携プロジェクト」を利用し、加齢医学研究所との共同研究も視野に入れて研究を進めています。私たちの研究が、東北アジア地域の地方部に蓄積された貴重な知識を発掘する際の一つの手がかりを提供できれば良いと願っています。



ナホトカ港：船の積み降ろし場所のすぐ隣に、鉄道の軌道（写真手前）が見える。海運と陸運との連携がとれている。



バルチザンスク-ウラジオストク間を移動中に立ち寄った農村の風景：左側に見えるのはウモロコシ畑。雑草が生い茂っている。奥に農家が見える。



ニューズレター 45号は2010年度第1号として、センター長の新年度の挨拶をはじめ、新メンバーやセンターの新たな刊行物の紹介を中心に構成しました。 (寺山恭輔)